

この連載で、アサヒ精版印刷社長、マリさん（篠山万里子さん）のプリンティングディレクターとしての仕事ぶりを、いくつかの作品集を通して見てきた。

鈴鹿芳康さんの「シンホールカメラ写真集『WIND MANDALA』」、津田直さんの奥琵琶湖の写真集「瀬（こぎ）」、東學さんの墨画集「天妖」、シマダタモツさんが手がけた図録「純粹なる形象—データーラムスの時代」、水野信四郎さんのウエディングドレス作品集——。

作者の「思い」を丁寧に引き出し、時に、とかかず往々にして無理難題を突き付けられて右往左往しながら形にしていく。そういう中でマリさん自身が芸術的感性に目覚めてやがいを感じ、次第に「作品集に力入れていきたい。これを新しい形の事業にできひんか」との思いを抱くようになっていた。それを具体化しようというのが、新しく発足される「A—gene press」（エージーンプレス）なのだ。

その裏付けともいえるのが「まだまだベテランの時代」と「紙はすたれない」という確信だ。ベテランの時代とは？ 「修業積んでる強み。ネットで見た目がいいのはできたり、根性なんでなんやねんというけど、積み重ねてきたものは強い」

ネット全盛の時代にあって、紙のメディアは新聞も含めてオールドメディアにならつた。が、マリさんが手掛けてきた作品集は紙でないと良さは伝わらない。ネット印刷で済ませられるものはそれでいい。「アサヒ精版でしかできないこと、残る印刷物を作つていかな」と。アサヒ精版さんは何かを生み出してるって印象を形にしていきたい

この新業態には、実はスタッフの“開放”的意味合いも込めている。「言で言うなら『感性を仕事に生かせ』だ。一度、酔ったマリさんが言ったことがある。「スタッフに言うてるんです。あんたらのおかしな感性を使わへんかつたら、この先、生きていけんでつて。パパ（先代の敬志朗さんが『動物園や』と言ったように、みんな夢人。それなのに隠そうとするんねん」隠さんでええやん、そんなことしてたらもたへんで——。「夜遅くまで、みんなめっちゃ仕事してんのに、なんでもうけられへんのやろ。お客様には喜んでもらつてると、どうしたらい？」自問した末にたどり着いた答えがこれだった。

来年、本格始動する「A—gene press」の第1弾作品集は、既に本人にオファーしている。まだ口説き落とせていないので、ここでは内緒にしつゝけど、第2弾の腹案もあるそうだ。作者とアサヒ精版や協力工場がワインになれる出版の仕組みも考えているという。「なんとかなるやろ、と思てるんですけど」とマリさんがふんわり笑うと、こっちままでなんとかなるんやろなあ、と思ってしまう。それはどこまでいつても「相手の喜ぶ顔が見たい」と「仕事は楽しくしよう」というマリさんのスタンスが変わらないからだろう。来年、軽やかに新たなハードルを飛び越えてるマリさんが見える——ような気がする。

晴  
レ

ル  
デ

来年も  
跳ぶ